

KITA

Kitakyushu
International
Techno-cooperative
Association

KITA ニュース

第25号

2006
January
No.25

随想

What's New(KITA創立25周年記念行事)

ニュース&レポート

わが社の研修協力記

人気講師の秘訣

KITA研修コースの紹介

トピックス



KITA創立25周年記念行事 12月15日(木) 北九州国際会議場

随 ZUI SO 想 ずいそう



(財)北九州国際技術協力協会
理事長

河野 拓夫

“もったいない”の国・・・

私たちは子供の頃、父や母、おじいさんや、おばあさんから“もったいない”という言葉を度々聞きましたし、そういう躰を受けてきました。

たとえば弁当を食べるときは、先ず蓋についたご飯粒をきれいにたべてから、本体に手をつけ、一粒も残さないで食べるように教えられました。お米の一粒ひとつぶには作った人々の大変な苦勞と思いが宿っているので、粗末にはしてはいけないという訳です。また、和服は仕立て直すことが当たり前でしたし、セーターは、ほどいて編み直したものです。物を大切に取り扱い、再使用、再利用することは庶民の心得として当然のことでした。その心の底には「もったいない」という思想が流れていたように思われます。

昨年、ケニアの環境副大臣ワンガリ・マータイさんが日本にやって来ました。この方はアフリカ人女性として、初めてノーベル平和賞を受賞された方ですが、日本について、次のような感想を述べておられます。

「はじめて日本の“もったいない”の意味を知った時、世界へのメッセージとして大事な言葉だと

直感しました。私はまず、“もったいない”の精神的なルーツに、とても惹かれました。そして、長年、環境問題に取り組む中で掲げてきた合言葉“3つのR”(リユース、リサイクル、リデュース)をたった一言で言い表しているのが素晴らしいと思いました。私たちが住む地球を破壊に追い込む深刻な脅威を減らすには、資源の無駄遣いをなくし、使えるものは再利用し、そして、そうでないものはリサイクルするしかありません。」

さすがノーベル平和賞を受賞された方だけあって、するどい洞察力と感性を持った方だと感心しました。身近な例ですが、開発途上国では、たくさんの方が飢餓に苦しんでいるというのに、日本ではコンビニエンス・ストアで賞味期限を過ぎた弁当が大量に廃棄されています。大量生産・大量消費、利益最優先が世の中を横行しているのが現状です。もっとつつましやかに、心のこもった生き方をしたいと思います。日本人の心の底に流れている“もったいない”の精神にもう一度、立ち直ってみてはどうでしょうか？

『KITA創立25周年記念行事』を盛大に開催

日 時 平成17年12月15日(木) 15:00 ~ 20:00

場 所 北九州国際会議場(小倉北区)

KITAは創立25周年を記念し、昨年暮れに式典、記念講演、パネルディスカッション、祝賀会、写真パネル展、グリーティングカード展を開催しました。

当日は厳しい寒さにもかかわらず、会場は多くの関係者や市民を含め300名を越える参加者で賑わいました。

記念式典

河野理事長挨拶(要旨)

創立25周年にあたり、設立母体の北九州青年会議所、北九州商工会議所、西日本工業倶楽部をはじめ、JICA、福岡県、北九州市、企業、大学および多くの市民の方々に心から感謝申し上げます。

この地球は人口の急速な増加と経済活動の拡大に伴い、深刻な環境問題を抱えました。持続可能な産業発展、循環型社会構造実現のためのクリーンプロダクションと3R(Recycle、Reuse、Reduce)の推進が、必須であります。

北九州には100年に亘る産業発展で培った高度な工業技術と、幾多の問題を克服してきた確かな環境技術、それを担ってきた人材が存在します。

KITAの使命は、これらの知識と経験を、必要とする国々へ伝えることにあります。これからも新しい時代の要請に積極的に対応し、全力でその責任を全うしてまいります。

来賓祝辞

末吉北九州市長と笠原JICA九州国際センター所長から、今後のKITAに対する期待と激励を込めてご祝辞をいただきました。

感謝状贈呈

KITA事業にご協力いただいている企業・国際奉仕団体・ホストファミリーの代表の方に河野理事長から感謝状が贈呈されました。



協力企業・団体の代表者へ感謝状贈呈

記念講演

国連開発計画(UNDP)親善大使として活躍されておられる女優の紺野美沙子さんに、「親善大使として見たこと感じたこと」と題して講演をしていただきました。



講演する国連開発計画親善大使 紺野美沙子さん

講演では、途上国への国際協力のありかたについて「それは子育てに似て、自らも学ぶ姿勢を持ちつつ、夫々の国に合わせて手を差し伸べることが必要」と熱く訴えられ、会場を埋めた聴衆は話しに惹きこまれていました。

パネルディスカッション



帰国研修員とのパネルディスカッション

パネルディスカッションは、「KITA 25年の技術協力を基に」をテーマに、成蹊大学名誉教授・KITA環境協力センター所長 廣野良吉氏をコーディネーターに、パネリストにはJICA帰国研修員のヴァルト氏(タイ)とアイビーさん(フィリピン)の3人で行われました。

帰国研修員からは、KITAでの研修の成果を生かし、それぞれの母国で活躍中との報告がありました。

帰国研修員の活躍はKITAにとってこの上ない喜びであり、今後の活動に大きな力を与えていただきました。

写真パネル展・グリーティングカード展

KITA 25年間のあゆみを刻んだ写真パネルと世界各国の帰国研修員から送られてきた2,000枚にのぼるグリーティングカードの展示を行いました。

祝賀会

記念式典の後、会議場イベントホールにおいて祝賀会を開催、多くの方々に遅くまで賑わいました。

最近6カ月間(平成17年7~12月)にKITAで研修修了したコース名(平成18年1月)

	コース名	受託先機関等	KITAコースリーダー (サブリーダー)	KITA研修期間(月/日)	研修人数
生産性向上及び 品質管理CP技術	アルゼンチン・中小企業 活性化支援	JICA	米澤 昌	7/25~8/12	8
	韓国・金属加工と品質向 上の技術	日韓財団 韓日財団	香山 研一 (三浦正克)	8/22~9/30	8
	韓国・技術者の生産性向 上技術	日韓財団 韓日財団	春田 益男 (三浦正克)	8/22~9/30	8
プラントエンジニ アリング及びメン テナンスCP技術	自動制御(基礎)	JICA	田嶋 澄夫	7/19~11/15	8
	韓国・設備の有効活用技 術	日韓財団 韓日財団	北田 弘 (三浦正克)	8/22~9/30	7
環境保全及び汚 染防止	ネパール・廃棄物処理	JICA	黒澤 準一	11/10~12/16	6
	生活排水対策	JICA	小川 勝 (山口勝)	8/29~11/25	10
	産業廃水処理技術	JICA	荒川 敏一 (真鍋多見夫)	8/1~11/18	6
	大気汚染源モニタリン グ管理	JICA	紅露 良次	10/3~12/22	7
	持続可能な発展のため の職業環境保健マネー ジメント	JICA	高橋 謙	8/15~11/30	11
	クウェート石油技術者の 大気汚染防止技術	JETRO/ アラビア石油㈱	田中 伸昌	11/28~12/9	7
	産業環境対策	JICA	川崎 淳司	5/23~8/18	6
環境管理及び省 エネCP技術	中国・鉄鋼業における環 境・資源・エネルギー管 理能力の形成	JICA	工藤 和也 (西野靖)	10/18~12/16	9
	日本の循環型社会の現 状と課題	JICA	指輪 勤	7/5~7/12 8/22~9/16	20
	持続可能な産業開発トッ プマネジメントセミナー	JICA	三木 義男	8/15~9/15	10
	フィリピン・都市及び産 業における環境管理、環 境対処能力向上	JICA	南 久雄	6/6~8/4	9
	韓国・中小企業管理者マ ネジメント基礎	日韓財団 韓日財団	石井 武明 (三浦正克)	8/22~9/30	6

計146名

韓国中小企業技術者専門セミナー成果発表会



セミナー参加者による成果発表

新たに導入したグループ討議を通じて学んだ手法を

今年度は期間を短縮し9月30日までの40日間、北九州で「中小企業技術者専門セミナー」を行い、29名(定員32名)が参加しました。

活かし、各人が抱えている問題に対し如何に効果的なアクションプランを作成し、成果に結び付けるかを発表して貰う「成果発表会」を11月22日と23日韓国・慶山研修院で行いました。

成果発表会では、各コース代表者の発表が行われ、セミナー終了後2ヶ月足らずの短期間でありましたが、相応の成果が見られました。代表を選ぶ段階で質疑応答を行い、他人の問題認識や経験を学び、他の意見やアイデアを貰うなどの効果も得られました。

続いて、石井コースリーダーから「仕事を円滑に進めるための行動ポイント」と題し、(資)日栄紙工社崎崎義人社長から「生き残りをかけた業務改善とオンライン商品の開発」についてご講話を頂き好評でした。

慶山市内の中小企業を視察し、企業実態を知り得て今後の研修に有益な情報が得られました。

来年度の事業改善について協議した結果、基本的には今年度と同じ期間のセミナーとし、実施時期を6～7月にして11月の成果発表会までの期間を確保することで基本的な方向性が確認されました。

(KITA技術協力部 木下健太郎記)

((財)旧韓産業技術協力財団、(財)韓日産業・技術協力財団より受託)

NEWS&REPORT

第12回九州(日本)・中国産業技術協議会出席

第12回九州・中国産業技術協議会が平成17年9月20日～25日の間、瀋陽・大連で開催されました。日本側60名、中国側100名の参加者で盛大な交流会でした。

大連ではハイテク開発区の見学を行いました。ハイテク工業団地が集約化された近代的な工業団地が形成されています。

九州・中国産業技術協議会は、中国側から遼寧省人民政府幹部の挨拶と、日本側から九州山口経済連合会/鎌田会長の挨拶に続き、日中両国から基調報告とプレゼンテーションがなされました。

日本側企業団体代表として筆者がKITAの活動状況を発表する機会を与えられました。

多くの参加者からKITAの活動状況がよく理解できたとのコメントをいただきました。

今回特に印象に残ったことは開発区の規模の大きさではなく、開発スピードの速さです。

一党独裁体制ではトップダウン方式の意思決定が行われることによって開発のスピードが速くなると感じました。

瀋陽や大連の工業団地に比べて日本の工場の競争力では到底太刀打ち出来ないと考えられます。日本の製造業がどのようにして生き残っていくのか、そのための戦略を練り直す必要に迫られています。

(KITA技術協力部 工藤和也記)

[主催:九州・中国産業技術協議会委員会]



工業団地と居住区域が調和した大連市

NEWS&REPORT

第12回九州(日本)・韓国経済交流会議に出席



九州と韓国が、貿易、投資及び産業技術の交流拡大と地域間交流を促進させるため、10月12日に韓国・忠清北道堤川九州(日本)・韓国経済交流会議(平成17年10月)市で本会議が開催されました。九州側からは、松井九州経済産業局長を団長に、自治体、関係機関から28名が参加し、韓国側からは、崔産業資源部国際協力投資局長を団長に政府、自治体、関係機関から45名が参加しました。

環境分野、人材育成事業、観光交流事業、自治体間交流事業など双方から提案された15項目28事業につ

いて協議し、合意を得ました。この中でKITAが実施している「韓国・中小企業技術者専門セミナー」については韓国側からも高く評価され、今後、日本語能力に問題のない参加者の確保、参加定員の確保、実施期間の適正化などに双方は努め、本事業の効果的实施について引き続き協力することとしました。

併催事業として開催された、「貿易促進セミナー」では、両地域間のバイオ産業協力について双方から発表され、「投資環境説明会」では九州側から自治体の立地環境の説明が行われました。

会議後ソウルへの移動の途中で、「清風文化財団地」と「セハンエノテク(株)」を視察しましたが、発電用ダム建設で出来た広大な湖と自然と歴史文化遺産を大切に作る気持ちをひしひしと感じました。

(KITA技術協力部 木下健太郎記)

JICA 理事長緒方貞子氏がKITA 来訪



JICA 緒方理事長とKITA 河野理事長(右) のご案内で KITA を来訪されました。午後一時過ぎに JICA 九州を出られ、木の葉が少し色づき始めた九州国際大学構内を徒歩で通り抜け、当協会がある国際村交流センターへ入られました。

KITA 河野理事長からは当協会の概要と活動方針を、

平成 17 年 9 月 26 日(月)、独立行政法人国際協力機構(JICA)の緒方理事長が、JICA 九州笠原所長のご案内で

松本研修部長からは JICA 研修への取り組み状況を、帰国研修員の母国での活躍ぶりも交えて説明し、熱心に聞いていただくことができました。その後、JICA が取り組んでいる現場主義、効果・効率性と迅速性などの観点から意見が交わされました。

緒方理事長からは、JICA 九州が実施している研修事業の約 40% を担当する KITA への期待を語っていただきました。さらに執務室にも立ち寄られ、居合わせたボランティアの面々に気軽に声をかけていただくなど、これからの私たちにとって大いに力づけられた意義深い一日でした。

空港へ向かわれる直前までの一時間三十分があっという間に過ぎましたが、忙しいスケジュールのなか、貴重な時間を作ってお越しいただいた緒方理事長には、心から感謝申し上げます。

NEWS&REPORT

ペルワジャ製鉄所(マレーシア)への技術協力(平成17年8月)

ペルワジャ・スチールは年間150万トンの粗鋼生産能力を有し、マレーシアで三番目の粗鋼生産量を誇る製鉄所です。製法は直接還元製鉄でブリケットを製造し、電気炉で粗鋼を生産しています。

電気炉スラグは、操業以来20年間全て構内の空き地に捨ててきました。蓄積されたスラグ量はおよそ100万トンに達しており、この中の鉄分を回収する方法について調査と診断を行いました。

現在の操業で発生するスラグからのメタル回収可能量は1,335T/月と推定されます。ヤードに蓄積されているスラグ中の鉄分は10万トン程度と推定されますが、詳細なデータはサンプリングと分析が必要です。このデータに基づいて設備投資とメリットを勘案し、どのような方法が良いか検討することになります。

スラグからの鉄分回収の方法については幾つかの案を

提示しました。さらに電炉で発生するスラグから鉄分を回収しやすい排滓法についてもリコメンドしました。

現在の排滓

法は電炉から直接炉下に排滓する極めて原始的な方法を採用していますが、この方法は粉塵の発生が激しく、作業環境悪化と安全上の問題のみならず電気、計装、コンピュータや機械部品に対しても悪影響を及ぼすこととなります。排滓方法の改善は重要な課題であると指摘しました。

(KITA 技術協力部 工藤和也記)



スラグと地金の堆積状況(ペルワジャ製鉄所)

NEWS&REPORT

KITA / 北九州メンテナンス技術研究会(KME) 平成17年度 総会・講演会

北九州メンテナンス技術研究会(KME)の平成17年度総会・講演会は、7月22日(金)に北九州市八幡東区の千草ホテルで行われました。

総会では、平成16年度事業報告及び17年度事業計画が審議され、事務局原案通り承認されました。

総会終了後3人の講師による講演会が行われ、会員会社の管理者、技術者68人が出席し、盛会裡に終了しました。演題及び講師は次の通りです。

企業のコンプライアンス(法令順守)について
大手町法律事務所 副代表

弁護士 中野 昌治氏
 静止機械のメンテナンスと診断技術者の役割
 九州工業大学 大学院 生命体工学研究科
 客員教授 安西 敏雄氏
 最近の配管検査技術と当社の配管管理の取り組み
 三菱化学エンジニアリング(株) エリア本部
 メンテナンス技術部 部長代理 永溝 久志氏
 法令順守にまつわる企業の不祥事について最近厳しい目がむけられているところから、今回は特に中野弁護

士から企業人として守らなければならない問題について講演をしていただきました。



KME講演会
 (KITA生産性協力センター 岩田利弘記)

「KITA/KME セミナー」平成17年度 受講実績

セミナー名	講師	実施月日	受講実績	
			会社数	受講者数
疲労・強度	(有) 浦島テクノサービス 浦島 親行氏 佐賀大学 教授 西田 新一氏	4月21(木),22日(金) 5月26(木),27日(金)	6社	8人
腐食・防食	九州工業大学 助教授 津留 豊氏 (株)新日化環境エンジニアリング 井上 政春氏 (株)材料・環境研究所 長野 博夫氏	6月17(金),23日(木) 6月29日(水) 6月30日(木)	7	10
溶接技術	九州工業大学 教授 加藤 光昭氏 九州工業大学 客員教授 安西 敏雄氏	7月27日(水) 7月28日(木)	9	13
トライボロジー (摩擦、摩耗、潤滑)	早稲田大学 大学院 情報生産システム研究科 教授 松本 将氏	8月30(火),31日(水)	8	13
制御技術	(株)安川電機(モータ制御) (インバータ制御) 三菱電機(株)(シーケンサ制御)	9月8日(木)pm 9月13日(火) 9月27(火),28日(水)	5	7
油圧制御	ボッシュ・レックスロス(株) 営業企画部 技師 田代 俊朗氏	10月28日(金)	6	15
工場内情報 ネットワーク 構築技術	早稲田大学 大学院 情報生産システム研究科 教授 李 義頡氏 早稲田大学 大学院 情報生産システム研究科 助教授 立野 繁之氏 早稲田大学 大学院 情報生産システム研究科 助教授 吉江 修氏	12月2日(金)	6	7
設備診断技術	(有)日本診断工学研究所 代表研究者 豊田 利夫氏	平成18年1月25(水),26日(木)	(5)	(6)
(注)受講実績の()内の数字は12月末現在の申込数			52社	79人

北九州環境国際協力人材バンク(EARTH) 海外研修の実施について



CPを導入した家具工場の視察

EARTHでは会員の人材育成のため国内外での研修会を実施してきました。本年度は、10月3日から8日の日程でフィリピン・セブ

研修を実施。行政、企業、NGO等の環境への取組みについて、次のようにセミナー及び視察等を行いました。

環境公開セミナー...地元のJICAフィリピン事務所長や国の地方事務所の行政官に加えEARTH会員2名も講演。

視察...北九州市の協力事業である廃水処理施設を視察したほか、CP導入で表彰を受けたコココーラ

ほか2工場を視察。7月にKITAが行った川の護岸植林地、日本の技術で臭気対策を行う養豚場、数年で満杯になる廃棄物最終処分場、日本のODAで建設された下水処理施設を視察。

エコツアー...観光開発が進むボホール島で、自然保護NGOと政府の協力事業について説明を受け、自然保

護指定区域等を見学。

今回の参加者からは「日本の技術が浸透していることを肌で感じた」「セブの現状は課題が山積みだが我々に協力できる部分を見つけることが出来た」「もっと地元の人と議論したかった」といった意見が寄せられました。ハードな日程を熱心にこなされた参加者の皆様には脱帽しました。

(KITA環境協力センター 柴 郁代記)
[北九州市から受託]

NEWS&REPORT

「地球環境市民大学校環境NGOと市民の集い ～地域と育つNGO、地域に生きる企業」を開催

KITA環境協力センターでは、平成17年10月23日(日)西日本総合展示場新館会議室において、九州・沖縄各県から約100人を越す参加者を迎えて「地球環境市民大学校環境NGOと市民の集い～地域と育つNGO、地域に生きる企業」(地球環境基金主催)を開催しました。

冒頭の記念講演では、(株)イオンフォレスト特別顧問 蟹瀬令子氏が、ザ・ボディショップによる世界各国での社会貢献活動を紹介。続いて九州・沖縄各県から参加した13の環境NGO団体から活動報告を行い、成蹊大学名誉教授 廣野良吉氏のコーディネートによるフロアディスカッションを行いました。

参加者からは、企業・行政・NGO・NPOそれぞれの立場での様々な質問・意見が出され、CSR(企業の社会的責任)への関心の高さが伺えました。また、併設さ

れた展示ブースでは、参加NGO団体のほか北九州環境ビジネス推進会(KICS)のパネル展示を行いました。

このような取り組みがNGOと企業にとって新たな関係構築のきっかけとなるよう、今後も積極的に続けていきたいと考えています。

(KITA環境協力センター 川寄孝之記)
[独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金から受託]



フロアディスカッションの様子

NEWS&REPORT

17年度廣野塾「国際協力人材育成セミナー」の開催



パネルディスカッション講師陣
(コーディネーター廣野所長)

なる標記セミナーを開催しました。70名近い参加があり、9割は学生で県外からの参加もありました。

午前中、「これから国際協力に関わる若者たちへ」と題し、当センター廣野良吉所長が基調講演をしました。その後パネルトークと分科会に移り、講師は国連ハピタッ

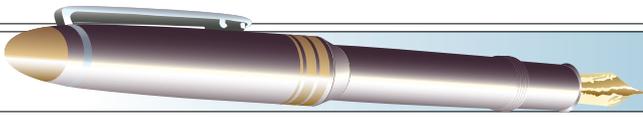
ト、世界銀行、JICA、オイスカ、立命館大学からお招きしました。午後5時30分(日)国際村交流センター国際会議室にて、KITA、北九州グリーンユース(学生環境NGO)の主催で、今年で3回目と

ト、世界銀行、JICA、オイスカ、立命館大学からお招きしました。

午後は5つのテーマに分かれてワークショップ形式の分科会を二時間半行い、その後全体会議で各分科会代表が「国際協力の夢企画」のプレゼンを行いました。1日中質問が活発に飛び交うなか、分科会では、開発途上国の状況を思い浮かべながら、自分たちに出来る国際協力の企画のまとめに奮闘していました。

参加者からは「心に焼きつく言葉がいくつもあった」「とても勉強になり大きな刺激になった」「もっと話を聞きたかった」など、多くの感想が寄せられました。この1日が多く参加者にとって国際協力で活躍するきっかけになればいいなと期待しています。

(KITA環境協力センター 柴 郁代記)



住友金属小倉

- 自動車用特殊鋼を生産する都市型製鉄所での研修 -

北九州市小倉北区許斐町1 商品開発部 担当課長 木戸 敦司

顧客満足度向上を实践する姿勢を 築でいただきたい



研修員と共に（筆者前列中央）

我が社は、その製品の約80%が自動車部品に適用されている特殊鋼棒鋼・線材メーカーです。日本の自動車産業は高い国際競争力を有していますが、それには日本の鉄鋼メーカー抜きには語れない、と自負しています。即ち、顧客（＝自動車メーカー）の満足度を向上させ続けた結果であると考えております。

我が社は、その製品の約80%が自動車部品に適用されている特殊鋼棒鋼・線材メーカーです。日本の自動車産業は高い国際競争力を有していますが、それには日本の鉄鋼メーカー

研修では、特殊鋼の使われ方（引抜、伸線、鍛造或いは切削工程等）とそこから要求される性能を視野に入れた開発・製造・販売等の座学、及び溶銑・溶鋼から棒鋼・線材製品製造までの工場見学を行っています。

また、近年になり、従来からあったモノの輸出という形に加え、例えばタイで伸線工場を操業する等、われわれ自身が海外に進出し、当地の顧客事業のサポートをするという新しい形も付加されてきています。こういったグローバルな特殊鋼の動きも紹介できれば、と思つて研修を行っています。

研修を受けられた方は、将来、我々の顧客になる、或いは競合相手になるかもしれない訳ですが、研修で培ったものを自分達なりにうまく咀嚼して問題解決に適用していただければ、研修の目的は十分達成されたと考えます。受入れ時に思うことは、「無事に研修を終えていただきたい」ということです。当社研修で、一人ひとりが一つでも得ることがあったなら、それは私たちにとっては望外の喜びです。

岡野バルブ製造株行橋工場

- 高温高压用特殊バルブの製作現場の実態研修 -

福岡県行橋市西泉4-4-1 行橋工場長 板谷 美芳

一つでも二つでも参考になるものを 持ち帰って欲しい

わが社は、火力、原子力用を中心に、高温高压で使用されるバルブを製造している会社です。非常に特殊なバルブで、特に原子力関係のバルブでは検査がきびしく、国内でも製造しているメーカーは少ないです。行橋工場は、バルブの鋳鋼素材と、口径8インチ以上の大型バルブの完成までを行っている工場です。

KITAの研修生は、年に2～3回工場見学に来社されます。研修の内容は、製造現場での安全衛生が目的であったり、非破壊検査がどのように活用されているかの見学であったり、その他諸々目的はありましたが、今までに、延べ数百名の方が研修に来社されております。

KITAの研修生は共通して明るく、非常に熱心です。わが社が、特殊な製品を製造している関係もあり、残念ながら、同じような製品を造っておられる会社の方は一人もおられませんでしたが、それでも何かを吸収して帰ろうとの姿勢が感じられました。鋳鋼工場における安全衛生活動や、非破壊検査が実際の製品にどのよ

うに適用されているか等について、できるだけ詳細に説明し、少しでもお役に立てるよう努力しましたが、通訳を介しての説明なので、十分理解いただけたか疑問も残ります。

今後、できるだけ理解していただけるよう資料作りを工夫し、又、説明の方法を検討しようと思つております。KITAの研修生は明るく、熱心なので、帰られた後は、当方も非常にさわやかです。わが社の製造技術が研修生の母国で直接役に立つことは無いかもしれませんが、一つでも二つでも何かの参考になればと願つております。



事前検討中の筆者（写真中央）

人気講師の秘訣

討論を織り込んだ講義をめざして

KITA講師
工学博士 阿部 光延

熱延鋼板の講義を仰せつかり、英文テキストを作って講義を始めたのは5年ほど前のことでした。最初の頃の講義では、テキスト全部を洩らさずに話すことに専念していましたが、それは聞いている人達にとっては、眠くなるような講義だったかもしれません。その後、研修監理員の佐々木様から助言をいただき、最近では討論を織り込んだ講義に切り替えております。

講義では、研修員各位の経歴などを考慮して、テキストの不要と思われる部分の説明を省略し、重要事項のみを抽出して講義します。その後、何人かの研修員から講義内容に関連するそれぞれの国の状況や課題を披露していただき、それをきっかけにして全員で討論するような形に誘導しております。

研修員の中には、熱延鋼板以外の厚板や条鋼を専門にしている人達もいますが、「熱延鋼板の金属学的原理は、厚板や条鋼など鉄鋼材料全般に共通している」と最初に説明し、できるだけ多くの研修員に発言していただくように仕掛けております。ときには研修員が、ボードに図を書きながら自分の直面している課題を説明してくれることがあり、それによって討論が活発になることもあります。

2006年1月には、インドネシアからの研修員の方々とお付き合いする予定になっております。討論の話題提供に役立つように、私の方もインドネシアの鉄鋼事情を少しは予習してから臨みたいと考えております。



講義中の筆者(前列右から2人目)

研修員とともに

元福岡工業大学
教授 村田 忠

私はノーベル化学賞受賞者の田中耕一氏を輩出した京都の島津製作所で長らく働いた後、縁あって大学に移りました。2つの大学で足かけ13年間、工学部で勤務し、定年の年に話があってKITAで「品質管理」と「信頼性工学」の2つの研修を担当させていただいています。

KITAでの私の研修方法は一方的な座学ではなく、研修員との意見交換を重視した教育を行っています。とくに「品質管理」の最終日には「魚の骨」(特性要因図)作成の演習を行います。そこでは最初に簡単な解説を行った後、彼等にテーマを与えてブレインストーミングと作図、そして成果の発表をやってもらいます。その時の私の驚きの体験をここに述べます。

研修員はそれぞれ本国では企業や政府機関でかなりの要職についており、しかも本国の興隆に情熱をもって新しい知識や技術の習得のため日本にやってきた青年・壮年技術者がほとんどです。そのため彼等の体験に基づくブレインストーミングやディスカッションは白熱しました。また2組に分けて作業したため、お互い良い意味での競争意識が働き、成果の発表時には質問や意見が続出しました。その時の状況は、我が国の企業でTQC華やかかなりし頃の熱気と全く同じでした。

人間というものは、その意志と環境さえ整えば、いつでも、どこでも、同じような感動がおきるものだなあと実感した次第です。教室で協力してくれていた研修監理員の方から「先生、珍しい授業でしたねえ」と言われたものでした。

教える側に誠意と熱意さえあれば、授業技術が少々まずくとも、こちらの思いや知識というものは自ずと研修員に伝わるものだとは私は手応えを感じました。



講義する筆者(前列中央)

K I T A 研修コースの紹介

(目的とねらい)



JICA研修『中・東欧地域産業環境対策コース』

コースリーダー 米澤 昌

本コースは1994年1月に「東欧地域産業環境対策コース」としてスタートし、ハンガリー5名、チェコ4名の研修員が参加しました。当初は1989年東西を分断するベルリンの壁が崩壊してから数年、社会主義から急速な市場経済への移行に伴い、大気汚染問題が深刻だったので、大気についての研修がメインでした。研修員は環境省官吏と民間企業の環境対策管理者で、北九州市の環境対策の歴史を学び、企業の公害防止施策の実情を実地に見て、それぞれの国での環境施策にフィードバックすることが目的でした。

その後、回を重ねる毎に研修対象国が増加し、ポーランド、マケドニア、スロバキア、スロベニアに加え、バルト3国のエストニア、ラトビア、リトアニアからも参加。対象を国・地方の環境行政官に絞り、コース目的も自国の環境政策立案能力に資することと明確にしました。そこで大気に

水質、廃棄物関係も加えてバランスさせ、環境関係全般の研修内容としています。

2004年5月欧州連合(EU)は中・東欧10か国を加え25か国となりました。この内8か国は本コースへの参加国です。彼ら研修員は厳しいEU環境基準をいつも念頭において研修に携わっていましたので、その成果を反映させ、基準達成に努力されたことだろうし、本研修が一助となっていると確信しています。

研修参加国が更に南下し「中・東欧地域」と名称を変え、ルーマニア、ブルガリア、クロアチアに加え、昨年から旧ユーゴ連邦のセルビア・モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴビナも入り、加えてウクライナ、モルドバからも参加しています。これらの国々は中欧と比較すれば環境対策はまだまだ劣っており、紛争等で環境が破壊され、再建資金不足に悩んでいます。本コースが引き続き彼らの国々へバックアップの役割を果たすことは間違いないと信じます。



韓国セミナー『技術者のための生産性向上技術』

コースリーダー 春田 益男

「技術者のための生産性向上技術コース」は、1994年に開講し、今年で12回になります。特に韓国中小企業技術者専門セミナーは、好評で受講者は既に、12年間で延べ405名に達しています。なかでも「生産性向上技術」コースはその中心として、セミナーを行ってきました。

中小企業の技術者にとって、生産性を上げ、いかにコストダウンに対応するかが最大の課題であります。そのための管理技術、生産性向上の技術、手法を学び、帰国後それらを、企業でいかに活用して成果を挙げるかが重要です。

生産性向上のために、IE、VE、QCなど、基礎的な管理技術を実習・演習を通じて実効のある技法として理解していただき、TPM、トヨタ生産方式、セル生産方式など日本の企業で行われている生産システ

ムを、企業で直接見学し受講することで、目で見ても学んでもらっています。

この生産性向上技術コースは内容が充実しており、韓国中小企業の技術者が受講することは、人にも企業にも大変価値あるセミナーだと思っています。このコースのカリキュラムは、日本の中小企業の技術者にも活用できるのではないかと考えています。

短期間のセミナーではありますが、日本語によるセミナーで構成していますので、日本語能力が受講効果を左右することになります。受講生は来日する前に日本語能力を高めてくる必要があります。セミナーの終わりごろになると、日本語能力はかなりの成果になっています。また、日本をよりよく理解しながら帰国しています。帰国した受講生が今後とも日韓友好関係の向上に大いに活躍してくれることを願っています。

黒澤コースリーダーへ JICA 九州から感謝状

去る10月6日(国際協力の日)にJICA九州国際センター笠原所長から当協会のコースリーダー黒澤準一氏に長年の国際協力に対し感謝状が授与されました。

黒澤氏は新日本製鐵(株)でご活躍された後、雇用促進事業団北九州職業能力開発短期大学の非常勤講師を勤められるかたわら、平成4年8月に当協会のコースリーダーを委嘱されました。その後現在に至るまで途上国研修員の受け入れ研修指導、海外技術指導、海外調査等広範囲な分野で、精力的な活動を今日まで続けられ、技術移転、国際親善に多大な貢献をされています。

ご趣味も多彩で、冒険をこよなく愛され、登山の技術はプロ級で、キリマンジャロ、モンブラン、マウナロア等世界の名山を多数登頂され、豊富な話題の持ち主でもあります。

今回の表彰を心よりお祝い申し上げますとともに、今後のご活躍を衷心より祈っております。
(研修部 松本健三記)



黒澤コースリーダー(左)と笠原所長

KITAへ助成金をいただきました

西日本国際財団 15万円 平成17年7月27日
ご厚意に感謝申し上げます

吉川育英会 15万円 平成17年9月28日

英語版 KITA ニュースの発行について

KITAの活動実態を広く海外に知ってもらうために、英語版KITAニュースを刊行して、今後の幅広いご協力をお願いすることになりました。昨年3月から具体的内容の検討を始め、ようやく9月末に創刊号が出来上がり世界各地に送りました。

主な掲載項目は、KITAがめざすもの、KITAの活動範囲と得意分野、2005年度KITA研修コース

計画、主なJICA研修コース紹介、研修に熱心な企業の対応ぶり、帰国研修員との交流状況、国際親善交流、KITA25年の歩み、研修員KITA受け入れ実績、KITA組織、KITA連絡先と所在地等です。

発行頻度は年2回程度と考えています。

(次回発行:平成18年4月初旬予定)

KITA ホームページをリニューアル

「KITAホームページ」は平成10年4月ホームページを開設以来、国内外から5万件を超えるアクセスがあり、ご好評をいただいております。昨年12月からは、さらにパワーアップしたホームページをお届けしています。是非ご覧ください。

なお、英語版ホームページについては、今年2月からご覧いただけるよう準備中です。今しばらくお待ちください。

ホームページアドレス <http://www.kita.or.jp>

KITA 人事異動

退任 KITA生産性協力センター副所長兼KITAニュース編集人

野里 照一(12月31日付)

新任 技術協力部

金子 敏保(9月1日付)

KITA生産性協力センター

脇阪 信治(9月1日付)

技術協力部専門部長兼KITA生産性協力センター副所長

木下健太郎(10月1日付)

技術協力部副部長

工藤 和也(10月1日付)

KITAニュース編集人

西岡 忠良(11月1日付)

編集後記

昨年の小泉劇場の旗揚げ興行は、これから数年先のわが国の進路を決めたようで、今後市民レベルへの成果配分と評価が楽しみ。

昨年9月JICA緒方理事長がご多忙のなか初めてKITAに立ち寄られ、今後への期待と激励に感銘を受けました。

年の瀬も迫った12月15日、当協会創立25周年記念行事を実施しましたところ300名を超える多士済のご出席を得て盛り上がり、明日からのエネルギーを与えていただきました。

平成10年春にKITA広報誌の立ち上げを企画し、内外から多くのご協力を得てはや7年が経過。当初は年4回日本語で作成し、最近は日本語と英語それぞれ年2回の作成とし海外へも目を向けています。広報誌の編集はやりがいがありました。(N)